オルケストラ　シンフォニカ　東京

第 32 回

# 定　期　演　奏　会

平成３年４月22日（月）　午後6:30開演

渋谷 東邦生命ホール

〔JR：渋谷駅南口東側より徒歩５分〕

# プログラム

## 第 1 部　　指揮：石 黒 不二夫

セレナータ No.4　　平山 英三郎

ある夏の幻想　　堀 清隆

夏の組曲　　武井 守成
宵雨の町
風鈴屋
海に歌う
花火見る子ら

バロック風 日本の四季より「夏」　　早川 正昭
（編曲：赤城 淳）
第1楽章 グラーヴェ・アレグロ ノン トロッポ
第2楽章 アンダンテ
第3楽章 アレグレット

## 第 2 部

ギター三重奏
スペイン組曲より　　I. アルベニス
グラナダ　　（編曲：H.カプス）
セヴィーリア　　（編曲：高梨芳臣）

第1ギター 山本雅三
第2ギター 西原 正
第3ギター 今津 章

四重奏曲　ト長調 op. 76　　C. ムニエル
第1楽章 アレグロ
第2楽章 クアージ アダージョ
第3楽章 ミヌエット・アレグレット
第4楽章 ロンド フィナーレ・アレグレット モッソ

第1マンドリン 岩片順子
第2マンドリン 田島明子
マンドラ 田中倭文子
ギター 宮本紀子

〔休 憩〕

## 第 3 部　　指揮：石 黒 不二夫

オルガ伯爵夫人 ― チャルダシュ　　M. マチョッキ

オアシスにて ― アラビア風間奏曲　　E. マルティ

交響詩 エカーヴの嘆き　　N. ラウダス

第3部は **飯島国男**氏の指揮で演奏する予定になっておりましたが、まことに無念なことに、この3月21日に急逝されました。
一昨年秋、……「今後の音楽生命を OST の指揮にかける」…… とまで言われて入会され、昨年5月から10月まで、僅かな間ですが OST を指揮されました。　氏の音楽性豊かでプレクトラムに精通された的確なご指導は、会員一同に深い感銘を与え、今後のご活躍に大きな期待を寄せておりました所、突然の訃報に接し惜別の念に耐えません。
この3曲は氏の指揮で練習した曲であり、ありし日の面影を偲びつゝ万感の思いを込めて演奏致します。
尚別紙の曲目解説も氏の筆によるものであります。

**飯島国男**氏の略歴：
1926年（大正15年）甲府市に生る。ヴァイオリン・ヴィオラを福井直弘、セロを中島 方、マンドリンを比留間きぬ子、指揮を沖 不可止 に師事。
1955年（昭和30年）NHKオーディシオンに合格（マンドリン・ソロ） JOKG 山梨放送管弦楽団常任指揮者となる。　以後も多彩な音楽活動を続け「文化功労実賞」外数々の表彰を受ける。
1989年（平成元年）「音の資料館」建設。　同年11月 OSTに入会。
日本マンドリン連盟理事、　日本弦楽指導者協会支部顧問、山梨交響楽団顧問、山梨大学嘱託、山梨大学 M.C. 常任指揮者を歴任。
著書：「小さな爪跡」「比留間賢八の生涯」など。

加除式法規書・法令解説書出版
中央法規出版株式会社
本　社　〒151 東京都渋谷区代々木2－27－4　電話（379）3861（代表）
営業所　　札幌・仙台・岐阜・大阪・広島・福岡

# 曲　目　解　説

## 第 1 部

邦人作家の、夏をテーマとした特色ある曲を、4曲揃えて見ました。

### セレナータ　No.4　　平　山　英三郎

当楽団（略称 OST）の特別会員として、今夕の演奏にも参加して居られる作者は、砧会を主宰され、マンドリン・ギターの指導及び作曲家として活躍されております。
この曲は7曲のセレナータの4番目の曲で、別名「夏のセレナータ」とも言われ、夏の涼しい宵を想わせる爽やかな曲です。

### ある夏の幻想　　堀　　清　隆（1900～1986）

作者は京都出身で、同志社大学在学の前後、瀬戸口藤吉・菅原明朗に音楽の基礎理論・作曲指揮技法を学びつゝ作曲を始めた。　1924年（大正13年）OST 武井守成主宰の第2回マンドリン合奏コンクールでは、指揮者としてラウダスの「ギリシヤ風狂詩曲」を演奏し、同大M.C. を連続優勝に導いた。卒業後 武井氏の推挙で宮内省に勤務、OST（タケイ）のメンバーとなり、演奏・作曲・指揮に活躍されたが、1949年（昭和24年）武井氏の死に会い、追悼のリクイエム「悲しき唄」op.19 を最後に作曲の筆を折り、次第に楽界から遠ざかって行った。　代表作には舞曲「陽炎」・組曲「初夏に寄する」などがある。
この曲は1939年（昭和14年）円熟期の作、夭折した愛児を偲びつゝ… 楽しい思い出、現実の悲しみを変幻の中にしみじみとうたい上げている。　雅楽「長保楽・急」をモチーフとして作曲されているが、ピアノ・木管を加えた華麗なオーケストレーションにより、殆どそれを感じさせない。　中間部のベルスーズ（子守歌）は愛児への鎮魂歌とも思われ、印象深い悲しいメロディーが2度くり返されている。　彼の作品はマンドラ　コントラルト（Alto）を効果的に使用したものが多く、この曲も例外でない。　原譜を忠実に再現し作者の意図に沿うべく、コントラルトを編成に加え演奏します。

### 夏　の　組　曲　　武　井　守　成（1890～1949）

OSTの前身であるオルケストラ　シンフォニカ　タケイの創設・主宰者であった作者の1928年（昭和3年）の作品。
Lento－Adagio－Largo のゆったりした流れから、一転して第4章の軽快な Allegretto へと移り、打楽器の効果と相俟って夏の情景と感情を見事に表現しており、近代的な曲想と和音を駆使している。
作者の言葉…… 第1章・初夏の下町の気分表現で描写ではない。　第2章・風鈴屋の感情描写で風鈴の擬音はワキ役である。第3章・風なく晴れ渡った海辺の朝、静かな海に向って歌う感じ。　第4章・花火の夜を待つ子供達の楽しさと焦だたしさ、打ち上げられた花火の五彩のひらめき、子供達の嘆美の歌などの、つゞられたもの。

### バロック風日本の四季より「夏」　　早　川　正　昭

作者は1934年（昭和9年）市川市に生れ6才から作曲を始めたと言われる。　東大卒業後、東京芸大作曲科に入学、1961年（昭和36年）ヴィヴァルディ合奏団を創設、古典舞踏研究会・作曲家協議会・日本指揮者協会に所属、作曲指揮著作に活躍中です。　代表作としては、広島の原爆をテーマとした「レクイエム　シャーンティ」・武井賞受賞のギター独奏曲「三つのプレリュード」・トロンボーン四重奏曲・協奏交響曲・木琴協奏曲など巾広い。
一方内外の有名な童謡・唱歌・民謡をテーマとした「バロック風○○○」と題した小品を数多く作曲しており、この曲もその内の一つで、弦楽合奏の原曲を、赤城淳が1978年（昭和53年）にマンドリン合奏用に編曲したものである。
第1楽章には「我は海の子」……（我は海の子白波の、さわぐ磯辺の松原に）、第2楽章には「雨」……（雨が降ります雨が降る、遊びに行きたし傘はなし）、第3楽章には「海」……（松原遠く消ゆる所、白帆の影は浮ぶ）と、お馴染の文部省唱歌のメロディーが、バロック風と言うより寧ろヴィヴァルディ風に散りばめられており、簡潔で楽しい曲です。

## 第 2 部

### スペイン組曲より「グラナダ」「セヴィーリア」　　I. アルベニス（1860～1909）

イサーク・アルベニスは近代スペインを代表する作曲家であるが、同時に〝スペインのリスト〟といわれた程の優れたピアニストでもあり、その作風は祖国の民俗的なリズムや旋律に基づき、ギターの手法を取り入れ、更にクラシックの技法を

加えて、洗練された物になっております。　彼の作品は、ギターの重要なレパートリーとなっており、そのスペイン的な色彩故にギターのオリジナル曲であるかの様に感じられる程ですが、原曲はすべてピアノ曲です。アルベニス自身も、同時代のギターの巨匠タルレガ演奏の「グラナダ」を聞いて、……「これこそ私が考えていたものだ」……と言ったと、伝えられています。
スペイン組曲は、1889年に書かれ、スペイン各地の地名を題名とした8曲から成る作品です。
「グラナダ」は第1曲目にあたり、彼が特に愛したアンダルシア地方の都の名を持つ、甘く情緒あふれる作品で、「セレナータ」の副題がつけられています。
「セヴィーリア」は第3曲目に当り、春祭りで賑わう西アンダルシアの街の情景が、民族舞踊セヴィリアーナのリズムに乗って生き生きと描かれています。

**四重奏曲ト長調　op. 76**　　C. ムニエル（1859～1911）

カルロ・ムニエルは、イタリアにおけるマンドリン音楽の父といわれ、作曲家としても独奏者としても有名な音楽家で、彼の純粋プレクトラム四重奏曲が3曲あることは、あまねく知られている。
本曲ト長調はその最初のもので、出版社の関係で本邦ではあまり行き亘っていない。　出版は1903年であるが、1892年ジェノヴァで開かれた国際作曲コンクールに金牌を受与されており、1890年フィレンツェで最初に（第一次）組織された四重奏団によって演奏されたが、この時ムニエルはリュートを受け持っております。出版に当っては、低音部リュートをギターに代えても演奏できる様に配慮されている。4楽章より成るこの曲は当時マンドリン音楽の擁護者であり、作曲家、評論家として知られているガバルド・ガバルディ伯爵に献曲されている。（注：この解説は、中野二郎氏より戴いた資料に基づいて、作られております。）

## 第 3 部

**オルガ伯爵夫人**― チャルダシュ　　M. マチョッキ（1872～1955）

マリオ・マチョッキはローマに生れフランスに帰化したが、ジュリアン、プーシュロンと共に、フランスを代表する作曲家である。　幼時から音楽の才能に恵まれ、18才でローマのマンドリン五重奏団を主宰。　その後、聖セチリア音楽院に入って作曲と共にヴァイオリン・チェロ・ピアノを習得、1900年フランスに移住し、オーケストラの指揮者も務めたが、1905年以来、パリにあってプレクトラムの指導に当り、その普及向上に尽力した。　彼がマンドリンの為に作曲及び編曲したものは大小数百曲あり、主に大合奏の作品で何れも親しみやすい。
この曲は彼の作品の中では数少ないチャルダシュ舞曲である。　チャルダシュというのは、ハンガリーの民族舞曲。　本来ジプシー音楽で、ゆるやかな導入部ラッセンと急速な主部フリスカよりなり、主部のシンコペート　リズムが特徴である。
この「オルガ伯爵夫人」は“叙情的な色彩”と“気品あふれる作風”として定評があり、彼の作品の中でも傑出した名曲といわれている。

**オアシスにて** ― アラビア風間奏曲　　E. マルティ（？　～1963）

エリスコ・マルティは斯界には珍らしいスペインの生れであるが、その経歴は詳らかでない。
本曲は1921年イタリアのプレクトラム音楽誌「イル・プレットロ」のコンクールに入賞した曲で、彼はこの名作一曲によってマンドリン界に不朽の名を留めている。　異国情緒豊かな「アラビア風間奏曲」でスケールの大きな作品である。　炎熱下のアラビア砂漠を往き通うラクダに乗った隊商の幾群れかが、今宵の露営にとオアシスを求めて次々に到着してくる。
晴れ渡った星空の下、夕食の焚火の周辺には酒を汲みかわす者、談笑し合う旅仲間、団らんから独り離れて遥かに故郷を偲ぶ者、賑やかな歌声に踊り出す者もいる。　旅の疲れを思い思いに憩う数刻、夜も更けてオアシスも静かに夢路を辿る。
未明の暁に隊商は再び砂漠の旅に出発する。　今宵のオアシスを求めて……。

交響詩　**エカーヴの嘆き**　　N. ラウダス（1879～1940）

ニコラス・ラウダスは、ギリシャにおけるマンドリンオリジナル作家というだけでなく、「マンドリナータ・アテニエーゼ」という有名な合奏団の指揮者として活躍、アメリカにも演奏旅行を行ない世界的な名声を博した。　合奏曲の作曲においても卓越した技法を示し、いくつかの名曲を生み出したが、特にこの「エカーヴの嘆き」と「ギリシャ風狂詩曲」は彼の二大傑作といわれている。
この曲は、ギリシャの詩人ホメロスの叙事詩「イリアッド」によるもので、トロイの皇后エカーヴが、ギリシャ軍との戦で我が子を失った悲しい運命を、音楽によって表わしている。　この劇的物語の描写と、相次いで起こるテンポの変化は革新的で、当時のマンドリン界で絶賛をあびた曲である。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 指揮： | ＊石黒不二夫 | コンサートマスター： | ＊肥沼成明 | |
| | | | ＊本間輝樹 | |
| 第一マンドリン： | 肥沼成明 | 新居裕久 | 幸田禎治 | 桑原功 |
| | 本間輝樹 | 秋元興光 | 田島明子 | 村上一二郎 |
| 第二マンドリン： | 宮崎泰行 | 市毛利喜夫 | 村上貴生 | |
| | ＊岡田茂 | 玉木利恵子 | 長利一夫 | |
| マンドラ コントラルト： | ＊岩片順子 | | | |
| マンドラ テノール： | 岩片順子 | 石井栄一 | 藤田正美 | |
| | 田中倭文子 | 渡辺清 | 佐藤一徳 | |
| ギター： | ＊今津章 | 宮本紀子 | 西原正 | 沢田高久 |
| | ＊山本雅三 | 城所敏雄 | 高橋悠介 | 沢田行雄 |
| マンドチェロ： | 鈴木功 | 平山英三郎 | ＊宮本皓永 | |
| マンドローネ： | 高田三九三 | ＊家城孝治 | | |
| コントラバス： | 佐藤正 | 粕谷幸久 | | |
| フルート： | 池田美紀 | | | |
| クラリネット： | 高橋淳二 | | | |
| ピアノ： | 福田りさ | | | |
| 打楽器： | 松原竜一 | | | |

〔＊ —— 役員〕


## 山本ミュージックコーナー

〒164 中野区東中野1-43-7 JR東中野駅東口南下車3分 TEL（363）9893

**取扱品目**

★手工マンドリン・ギター各種
★各社マンドリン・ギター
★マンドリン・ギター用弦及附属品

お気軽にお立寄り下さい。

マンドリン教室
平山英三郎 先生

ギター教室
平山英三郎 先生



オルケストラ シンフォニカ 東京 （OST）
代表幹事 今津 章
事務所：〒241 横浜市旭区中尾町82－1 ☎045－363－1046